

平成25年度教育学部スポーツ科学コース 卒業論文要旨集 目次

頁	氏名	題目
2	浅野 拓土	プロゴルフ大会の冠スポンサーの宣伝効果に関する一考察
3	池田 綾子	大学陸上選手における競技成績と社会心理的要因との関連～中四国短距離選手を対象として～
4	石川 真菜	体操競技における運動抑止現象に関する運動学的一考察
5	石村 侑大	陸上競技短距離選手の競技力向上を目的としたメンタルトレーニングの実践
6	伊藤 拓史	サッカー選手の全身持久力に関する一考察
7	大羽 寛史	陸上競技走幅跳の助走速度に関する一考察
8	籠場 友哉	長距離ランニングにおける着地方法がランニング効率に及ぼす影響
9	佐藤 俊介	外野手の投動作における運動学的一考察
10	島谷 直希	運動・スポーツ指導現場における暴力行為(体罰)に関する一考察
11	諏訪 裕祐	短距離走における体幹筋トレーニングの効果についての一考察
12	瀬川 元稀	バレーボール選手の心理的競技能力に関する一考察
13	田川 義豊	スポーツ指導での体罰についての一考察
14	寺西 亜里彩	競泳選手の専門距離別心理特性と心理的競技能力
15	那谷 侑平	サッカーのゴールキーパーのセービングに関する運動学的一考察
16	宮川 晃至	高知県と静岡県のサッカー文化の比較―第4種を中心に―
17	宮地 夏帆	チームの強さは何でつくられるのか?～集団規範・凝集性と自律性との関連性から～
18	森永 教稔	サッカーゲーム中における審判員及びボールの移動距離に関する一考察
19	山崎 晋哉	サッカー選手のポジションと性格に関する一考察～高知大学体育会系サッカー部を対象として～
20	山本 有茄	車椅子バスケットボール競技者の困難克服と生活観に関する研究～先行要因・心理的要因・外的要因に着目して～
21	渡部 亮武	小学生年代における8人制サッカーに関する一考察

プロゴルフ大会の冠スポンサーの宣伝効果に関する一考察

スポーツ科学コース 辻田研究室 指導教員 辻田宏 B102H201X 氏名 浅野拓土

1. 研究目的

本研究は、冠大会の宣伝効果について、具体的に以下のことを明らかにしたい。

- ① プロゴルフの冠大会が国内でどのくらい開催されており、どのような業種の企業が、どのようなかたちや頻度でスポンサーとして参入しているのかを明らかにする。
- ② スポンサー企業・大会開催ホームページ等から、企業はどのような意図・目的を持って参入しているのかを明らかにする。
- ③ アンケートを通して、スポンサー企業の宣伝効果のゴルフプレイヤーや一般市民への波及度を明らかにする。

2. 研究方法

・文献・資料研究

冠大会の歴史やどのような大会があり、どのようなスポンサーが主催しているのかを明らかにする。

・アンケート調査

<調査対象>

高知県のゴルフプレイヤーとゴルフ未経験者の一般市民を対象とする。

<調査方法>

ゴルフプレイヤーのアンケートは、ゴルフ場・ゴルフ練習場に訪問し、現地調査、もしくは、アンケート用紙をアンケート依頼文と返信用封筒を添えて郵送し、記入、返信してもらう方法をとった。

一般市民については、高知市内で街頭アンケートを実施する。

3. 結果と考察

- ・スポンサーとして参入する頻度と業種について
男女ゴルフの業種内訳について、製造業の参入

が最も多く見られた。その中でも、食品会社が多いことが言える。次いで、情報通信業が参入しているが、「フジテレビ」・「産経新聞」が協賛する大会が男女ともに開催されるのが分かった。

・スポンサーとして参入する意図・目的

企業がゴルフ大会にどのような意図・目的を持って参入しているのかについて、「企業・団体の宣伝」、「商品・サービスの宣伝」、「地域貢献」、「社会貢献/CSR」²⁹⁾という4つの目的を抽出した。

大会に協賛するという視点から考えると、経済的価値と社会的価値の両者ともに、相乗効果があることから、企業は利益のみならず、地域社会の成長も目指していると言える。

・スポンサー企業の宣伝効果の波及度

(1) テレビ中継を見る人よりもゴルフ場で観戦する人の宣伝効果が高い。

(2) ゴルファーより、一般市民の方が冠スポンサーの影響を受け易いことが言える。

(3) 冠スポンサーが視聴者・観戦者に良いイメージを与えていると思っている割合について、ゴルファーがテレビ中継を見て良いイメージを与えていると思っている割合は、一般市民よりも高かったが、ゴルフ場で観戦して良いイメージを与えていると思っている割合は、一般市民がゴルファーを上回った。

以上のことから、ゴルファーよりも一般市民の方が冠スポンサーの影響を受け易いことから、冠大会を開催するにあたって、スポンサー企業は、一般市民の方に宣伝効果があると言える。

大学陸上選手における競技成績と社会心理的要因との関連

～中四国短距離選手を対象として～

スポーツ科学コース スポーツ社会学研究室 常行泰子

B102H202R 池田綾子

1. はじめに

2020年東京オリンピック・パラリンピックが決定したことにより、競技スポーツが注目を集めると予想される。しかし、競技スポーツにとって重要な競技成績に関する研究の多くは、バイオメカニクスや運動生理学の分野での研究蓄積であり(池袋, 2011)、社会学的見知による研究蓄積は少ない。中四国の陸上競技をしている学生の競技成績向上のためにも社会心理的見知からのアプローチは必要であり、競技成績に影響を及ぼしている要因について検証することは重要であると考えられる。よって、本研究では、中四国の大学の陸上競技部に所属し、特に短距離を専門に行う学生の競技成績と関連する社会心理的要因について明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

対象者は中四国の陸上競技部に所属し短距離を専門に行う学生 256 名で、質問紙を配布し、有効回答標本数は 127 票(有効回収率 49.6%)であった。調査項目は、個人的属性(5項目)、競技成績に関すること(3項目)、日常生活に関すること(5項目)、周りの環境(7項目)、心理的要因(3項目)＋競技意欲(4項目)、トレーニング方法(自由記述)から構成した。分析方法は単純集計、クロス集計、t検定、相関分析、回帰分析、重回帰分析を用いることとし、「準決勝以上」「準決勝以下」の2群に分類した。データの加工および統計処理は、統計パッケージ(SPSS)を使用した。

3. 結果および考察

競技成績と個人的属性、社会心理的要因の比較分析を行った結果、「自己ベストタイム」「アルバイトの有無」「睡眠時間」「陸上競技をする目的(楽しみ)」「自己実現意欲」「学年」の項目について、有意な差が認められた。また、全項目で「準決勝

以上」の方が高い値を示した。さらに、「競技成績」を従属変数とする重回帰分析を行った結果、社会心理的要因である「アルバイトの有無」「睡眠時間」「自己実現意欲」が競技成績に影響を及ぼしていることがわかった。「競技成績が高い群の方が、アルバイトを行っている」という結果の裏には、経済的な側面が隠されていると思われる。競技を行うには一定の経済力が必要であり、人より高い水準で競技を行うには、それに見合った経済力が必要である。一人暮らしなど、大学生特有の経済状況からアルバイトは必要であり、過度な労働状況でない限り、競技成績に対して阻害要因にならないと推察される。さらに、「競技成績が高い群の方が、睡眠時間が長い」という結果に関しては、吉田ほか(2003)の研究を支持するものであり、競技を行うにおいて睡眠時間を確保することは重要なことであることがわかった。よって、睡眠は競技力向上するための大切な要因であることが示唆された。

4. 結論

競技成績と「自己ベストタイム」「アルバイトの有無」「睡眠時間」「陸上競技をする目的(楽しみ)」「自己実現意欲」「学年」との間に関連が認められ、全項目において「準決勝以上」の群の方が有意に高い値を示した。また、競技成績に影響を及ぼしている変数は、「アルバイトの有無」「睡眠時間」「自己実現意欲」の3項目であり、全分散の24.7%が説明されていた。以上の点を踏まえて、競技成績が高い選手は、アルバイトを行いつつも十分な睡眠時間を確保でき、陸上競技を「楽しみ」とする自己実現意欲が高い選手であるという結論が導きだされた。

体操競技における運動抑止現象に関する運動学的一考察

教育学部 生涯教育課程 スポーツ科学コース

スポーツ運動学研究室 指導教員 神家一成

B102H203P 石川 真菜

1. 研究目的

これまで、運動抑止現象を生活史に基づいて、行う研究がなされてきたが、現象を克服した選手の意見が少ないことが現状である。

このことから運動生活史を基に運動抑止現象の原因や状況を明らかにするとともに選手の立場からの解消法を立案することによって体操競技における運動抑止現象の問題解決に寄与することを目的とした。

2. 研究方法

アンケート調査において、第 64 回全日本学生体操競技選手権大会に出場した大学のうち協力を得られた 11 大学に所属する運動抑止現象を経験したことのある女子大学生選手を対象とした。

また、アンケートで回答を得た 42 名から 3 名を抜粋し、1 人 1 時間程度のインタビューを行い、研究者でもある M 選手においてはインタビューの代わりに運動生活史を基に考察した。

3. 結論

〈運動抑止現象の契機〉

運動抑止現象が生じる契機は、以下の 2 つのパターンがあることが示唆された。

- ①インパクトのある失敗体験から、運動のイメージにマイナスのイメージがつくられ、自分の成功のイメージを信用でなく

なってしまったパターン。

- ②内的精神的関係から途中で運動を止めることを繰り返し、運動をすることに躊躇する癖がついてしまい、自分の感覚や能力に不信感を抱くようになってしまったパターン。

〈運動抑止現象が生じる原因〉

上記で挙げた契機から、運動抑止を起こす原因の 1 つに、「自分の不信感」がある。それは、自分のなかにある技への感覚や自分の能力に対して自信が持てなくなるからである。

〈運動抑止現象の解消法〉

運動抑止を解消するための指導は、以下の 3 点が示唆された。

- ①目標設定を工夫すること。

成功できる目標を設定させ、成功体験を蓄積することで、自信を回復することができる。

- ②周囲との関係を築くこと。

周囲の声や態度は、運動抑止を軽減させる力も悪化させる力も持っている。指導者は選手が、今何を求めているかを読み取って、人間関係の形成を援助する必要がある。

- ③成功イメージを強化すること。

運動抑止を起している選手は、強いマイナスなイメージを抱いてしまっているため、成功体験を積み重ねることを必要とする。

陸上競技短距離選手の競技力向上を目的としたメンタルトレーニングの実践

スポーツ科学コース スポーツ心理学研究室 指導教員 矢野宏光 氏名 石村侑大

1. はじめに

近年、メンタルトレーニング（以下 MT）を取り入れた選手がオリンピックや世界大会などで優秀な成績を収めた事例が多く取り上げられている。そのため、MT がスポーツの競技力向上において重要な一因であることは明らかである。しかし、その対象の中心は、まだトップレベルのスポーツ選手であり、MT の内容や方法が大学生スポーツに選手にまでは普及しているとは言えず、その事例も少ないのが現状である。

2. 研究目的

本研究では、競技力向上を目的とした MT を大学生陸上競技短距離選手に実践することにより、競技力の向上・自己の正しい認知・心理的側面の安定性を図り、今後の指導場面における資料とすることを目的としている。

3. 研究方法

(1) 研究対象者

K 大学の陸上競技部に所属する大学生陸上競技選手 9 名を対象とし、MT 実施群（以下 MT 群）の 5 名と統制群（以下 CT 群）の 4 名を設定した。

(2) 研究期間

- 1) MT 実施期間：平成 25 年 7 月～12 月
- 2) 分析・考察期間：平成 25 年 12 月～1 月
- 3) まとめ期間：平成 25 年 1 月中

(3) 研究内容

MT に関する先行研究や資料等を参考にするとともに、中込ら（1994）が作成した MT のプログラムを著した「メンタルトレーニングワークブック（以下ワークブック）」ⁱに基づいて、自己の正しい認識や気付きの能力を養うために、自立訓練法やリラクセーション技法、イメージトレーニングなどの MT（全 9 回）を行った。また、独自に作成したフェイスシートと気付きシート、既成の

3 種類の検査用紙（①DIPCA2、②POMStm 短縮版ⁱⁱⁱ、③GSES^{iv}）を使用し、MT を実施することによる心理的变化を測定した。

4. 研究結果

(1) MT 群と CT 群について、MT プログラム施行前後での POMS の変化を分析した結果、5 尺度（緊張 - 不安、抑うつ - 落ち込み、怒り - 敵意、疲労、混乱）と TMD（総合的感情指標）において、MT 群は CT 群より有意に良好な変化を示した。一方、CT 群は安定した気分の状態を維持することができなかった。

(2) MT 施行前後での DIPCA の結果を分析した結果、MT 群が CT 群に比べ有意に協調性が高くなっていることが判明した。また、一般性自己効力感を検査する GSES において、MT 群は MT 施行後に一般性自己効力感の向上が認められた。

MT 開始前と MT 開始後の競技記録を比較した結果、100m 走の記録において、MT 群全員が MT 前よりも MT 後に速い記録を出した。

5. まとめ

MT を施行した結果、以下の結果が示された。

- ①MT 群の 100m 走の記録が向上した。
- ②MT 群の協調性、自己効力感が高まった。
- ③MT 群は、MT の施行期間全般を通して心理的に良好な状態が維持された。

6. 参考文献

- ⁱ編著 中込四郎 著者 土屋裕睦、高橋幸治、高野聡（94）道と書院メンタルトレーニングワークブック
- ⁱⁱ徳永・橋本作成 サクセスベル株式会社 心理的競技能力診断検査（DIPCA2）
- ⁱⁱⁱ原著 M. Lorr, D. M. McNair, JWP. Heuchert, L. F. Droppleman 構成、横山和仁、金子書房、POMStm 短縮版
- ^{iv}著者板野・東條（86）GSES 一般性セルフ・エフィカシー（自己効力感）尺度

サッカー選手の全身持久力に関する一考察

スポーツ科学コース スポーツ生理学研究室 駒井説夫 B102H205S 伊藤拓史

I. 研究目的

本研究では、Yo-Yo テストに着目し、Yo-Yo テストの結果がこれまで実施されてきた12分間走、さらにはサッカーの試合中の運動量との関係について検討するとともに、サッカー選手よりも一般的な全身持久力に優れている陸上長距離選手とサッカー選手とを Yo-Yo テストを用いて比較することにより、サッカー選手の持久力の特異性について明らかにする事を目的とした。

II. 研究方法

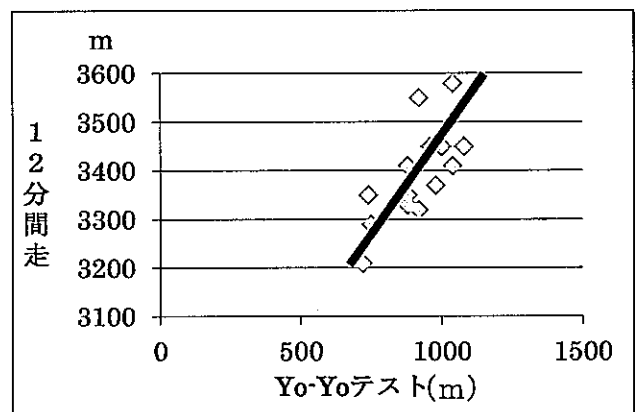
測定は、全身持久力を評価するフィールドテスト（12分間走及び Yo-Yo テスト）とサッカーの試合中の運動量（移動距離、移動速度）について実施した。測定対象とする試合は本学体育会サッカー部の部内リーグ（I リーグ）40分ハーフを測定。Yo-Yo テストは2.5m 区間を5秒間ジョギングで往復することで休息をし、20m 区間をインターバル走で往復する。レベルが上がるにつれてシグナル音が短くなり音に遅れることなくゴールできた回数（距離）で評価する。

被験者は、高知大学サッカー部15名と高知大学陸上競技部（長距離選手）6名を被験者とした。

III. 結果及び考察

陸上長距離選手において、Yo-Yo テストと12分間走の関係に相関が認められなかった。サッカー選手と比較すると、12分間走は有意な値を示した。12分間走において、Yo-Yo テストとは異なり、繰り返し動作を含まない一定の速度で走る運動であるため、一定の速度で長い距離を走る長距離選手の運動特性に適しているといえる。Yo-Yo テストにおいて、サッカー選手と比較した結果、筋力的側面や技術的側面、さらに運動の特異性から低値を示した。よって陸上長距離選手の持久力を評価するテストとして Yo-Yo テストは不適切で

あるといえる。サッカー選手において、Yo-Yo テストと12分間走の関係に有意な相関が認められた。陸上長距離選手と比較すると、12分間走は低値を示したが、それでも12分間走の評価としては「良」の評価であった。12分間走は最大酸素摂取量との関係に有意な相関が認められており、持久力を評価するテストとして優れていることが認められている。Yo-Yo テストにおいて、12分間走と同様に最大酸素摂取量との関係に有意な相関が認められており、瞬発的に筋力を評価する（無酸素性作業能力）との関係にも有意な相関が認められている。サッカーの試合中の運動量（移動距離、移動速度）を測定した結果からサッカーの運動特性は間欠的な高強度の運動であり、Yo-Yo テストの運動の特性と合致した。



図：サッカー選手における Yo-Yo テストと12分間走の関係

IV. 結論

サッカー選手の持久力を評価する上で、Yo-Yo テストは、有酸素性作業能力の向上に加え、無酸素性作業能力にも有意な相関があり、サッカーの運動特性にも合致することから12分間走よりも Yo-Yo テストの方が適している。

陸上競技走幅跳の助走速度に関する一考察

生理学研究室 担当教員：駒井 説夫 B102H206T 大羽 寛史

目的

一般に走幅跳の記録は踏切時の初速度の大きさと初速度の角度によって決まる。踏切時の跳躍技術(助走で得た水平方向のスピードを踏切で鉛直方向への変換)も重要であるが、踏切に至るまでの3つの局面の動きが非常に重要となってくる。ここでの動きというのは競技者の助走歩数、各局面、区間におけるストライド・ピッチの変化や助走速度そのものとの関係が深いことから、競技者の助走・跳躍技術力に加え助走速度が速いことが良いパフォーマンスを発揮することが要因と言える。助走速度については単に全速力で助走すれば良いというのではなく自己が踏み切る事のできる最大速度で走る事が理想的であると考えられる。そのことは、助走のスピードが速くなればなるほど踏切時に求められる技術もより高度になってくるからである。木野村¹⁾らによると個人差はあるものの助走速度の増加は踏切時間の減少と跳躍距離の増加に影響すると報告している。

方法

高知大学陸上競技場の走幅跳ピットに光電管式速度測定装置を設置し、各地点の通過時間を測定し速度を求めた。助走速度は、踏切線 1m 手前～6m、6m～11m、11m～21m、21m～31m の4区間を 1/1000 秒単位で計測した。光電管の高さは地表から 0.9m に設置し風の強さも考慮するため風速も測定した。まず試技① 各個人の助走距離からのスプリントを実施した際の速度を計測し、次に試技② 助走から踏切までを実施した際の速度、最後に試技③ 助走から跳躍までを実施した際の速度を計測した。①および③については各2本、②については1本で合計5本計測を行った。

結果及び考察

本研究ではまず被験者の助走時の意識の違いにより助走速度に変化が表れるのか測定するため3種類の助走方法で測定を行った。いずれの助走方法でも各被験者の最高速度や最高速度の発揮された地点には差異は見られなかったが速度変化曲線については違いが見られた。試技②であ

る助走から踏切までの試行と試技③である全助走跳躍時の試行を比較してみると、試技③である全助走跳躍時では被験者 A～D の場合、踏切 11m 手前の地点で助走における最高速度に達し、その後の踏切 11m 手前～6m 区間で一旦助走速度の減少が見られ、その後踏切 6m 手前～1m の区間で再度加速し踏切の際には最も速度が高かった。一方試技②助走から踏切までの変化について見ると被験者 B,C では全助走跳躍時と同じ様な変化を示しているが、被験者 A では踏切 6m 手前で最高速度に達し踏切 1m 手前ではむしろ減速していた。この2つの変化の違いは踏切 6m 手前と 1m 手前地点の速度であり、これには被験者の跳躍技術と意識が関係していると考えられる。

まとめ

1. 試技①～③を行ったところ各被験者間で助走における最高速度と最高速度が発揮された地点に差異はなかった。しかし被験者 a において試技②と試技③で踏切 6m 手前地点と 1m 手前地点の助走速度に違いが見られ、このことから被験者の踏切(跳躍動作)への意識の違いが競技者の助走速度に影響を及ぼしていると考えられる。
2. 1.の内容に加え走幅跳の一流選手の助走データや先行研究から明らかになっていることを比較・分析した結果、走幅跳の全助走跳躍練習時に踏切手前 13.5m～12.5m間、踏切手前 7～5m地点に意識を持つ(マーカ一、パイロンを設置)ことで、走幅跳助走時のポイントとなる部分が明確になりより効果的に走幅跳の跳躍練習に取り組めるのではないかと考えられる。

長距離ランニングにおける着地方法がランニング効率に及ぼす影響

スポーツ科学コース 生理学研究室 指導教員：駒井 説夫 B102H207H 籠場 友哉

I. 研究目的

長距離走パフォーマンスの主な決定因子は、最大酸素摂取量 ($\dot{V}O_{2\max}$) や乳酸性作業域値 (LT) であると多くの研究により報告されてきた。近年はランニング効率の重要性が指摘されているが、どうしたらランニング効率を高められるのかが明らかにされてこなかったため、実践的な研究や新たなトレーニング方法の開発には至っていない。着地方法とランニング効率との関係についての研究はほとんど見られないが、近年の全国大会や国際大会において、前足部着地の選手が多く見受けられる。本研究では、まず長距離ランニングにおける着地方法の実情を把握し、さらに着地方法の違いがランニング効率に及ぼす影響を明らかにすることで、ランニング効率を向上させる着地方法を検討するための一資料とすることを目的とした。

II. 事前調査

長距離ランニングにおける着地方法の実情を明らかにする目的で、第36回中国四国学生陸上競技選手権大会で男子5000mを完走した192名を対象に調査を行った。男子5000mレース中の3000m地点での着地方法をハイスピードカメラで撮影し、「前足部着地」、「フラット着地」、「踵着地」の3つに区分した。その結果、踵着地をしている者は全体の41%であり、フラット着地が55%と一番多くを占めた。パフォーマンスレベルの高い者ほどフラット着地または前足部着地であり、パフォーマンスレベルの低い者ほど踵着地である傾向が示された。

III. 研究方法

被験者は高知大学陸上競技部に所属する健康な男子長距離選手6名を用いた。被験者は十分なウォーミングアップを行った後、400mトラックにて長距離ランニング(2000m×3本)を行った。その際、1本目180steps/min、2本目185steps/min、3本目190steps/minのピッチと

なるよう電子メトロノームを装着し行った。手首にはGPS付き腕時計を、胸には心拍計を、靴にはフットポットを装着した。測定は2日間行い、1日目は「踵着地」、2日目は「前足部着地」をするフォームで行った。測定項目は①心拍数②ピッチ③1000mラップタイム④2000mタイムとし、⑤ストライド⑥走速度は実験後に測定結果から算出することとした。

IV. 結果と考察

踵着地と前足部着地における心拍数と走速度の関係について、低い心拍数(170bpm)では前足部着地より踵着地の方が走速度が高いことが示された。高い心拍数(200bpm)では踵着地より前足部着地の方が走速度が高まり、長距離走のレースペースでは着地方法の違いによる走速度の違いは示されなかった。心拍数と走速度の関係から、着地方法の違いによるランニング効率の差は見られなかった。

踵着地と前足部着地におけるピッチとストライドの関係について、180spm、185spm、190spmいずれのピッチにおいても前足部着地の方が踵着地よりストライドは長く、さらに前足部着地ではピッチを上げてストライドは減少しなかった。一方、踵着地ではピッチ185spmで最高値を記録したが、それ以上にピッチを上げると極端にストライドは減少した。ピッチとストライドの関係から、踵着地より前足部着地の方がランニング効率に良い影響を及ぼすことが示された。

IV. 結論

長距離ランニングにおいてランニング効率を向上させ走速度を上げるためには、ピッチの増加とストライドの伸長が必要である。そのためには踵着地より前足部着地でのランニングフォームが適していると考えられる。前足部着地を習得することで、今回の結果以上に踵着地との差が生まれることが期待できるだろう。

外野手の投動作における運動学的一考察

スポーツ科学コース スポーツ運動学研究室 指導教員：神家一成

学籍番号：B102H208K 氏名：佐藤 俊介

1. 研究目的

外野手の中には素早く全力投球しようとする内野手が素早く投げる際によく見られる身体の水平面運動を起こしてしまい、ボールに横回転の力が加わりボールがスライドする投球になる場合がある。そこで、投げる上で重要となる下半身に注目し、軸足側の腰が反対側の腰に上から覆いかぶさるようにして投げる下半身の鉛直面運動を行うことで動きがどう変化するかを明らかにすることを目的とします。

2. 研究方法

実験目的：下半身の鉛直面運動を行うことによって外野手のバックホーム送球にどのような変化が起きるのかを明らかにすることを目的とする。

実験対象：高知大学硬式野球部に所属する外野手3名です。

実験日程： ・一次実験 平成25年 10月30日（水）
・二次実験 平成25年 12月 2日（月）

実験内容：一次実験二次実験ともにセンターポジションからバックホーム送球をさせる。一次実験では普段通りに送球させ、二次実験では

① 準備局面のバックスイング時に両肩両方腰を結んだラインが投げる方向へ一直線に向くように構える。

② 主要局面のフォワードスイング時から終末局面時に左足を上に蹴り上げ、左腰が右腰の上に覆いかぶさるようにして投げる。（左効きの場合）①、②のことを意識させ送球させた。両日ともに投げた際に感じたことを、自己観察記録用紙に記入させた。

映像解析：三次元解析ソフト「Frame - DIAS IV」を用い撮影した映像を資料化する。

3. 結論

（Ⅰ）レイトコッキング期時点で蹴上がりによる下半身の鉛直面運動を行うことで、下半身の縦の動きが加わり、それに上半身に連動することで、肘が上がり、肘を抜きやすいフォームに変化した。

（Ⅱ）下半身の鉛直面運動を行うことで、下半身に明らかな変化が見られない場合もあるが、意識をすることで運動内感が変化し上半身に縦の変化が現れた。

（Ⅲ）肘が抜きやすいフォームに変化したことで、より前でボールをリリースできるようになり、ボールに指がかかるようになった。

（Ⅳ）下半身の蹴り上げを行うことで、軸足から非軸足への体重移動がスムーズになり、前に力を加えやすくなった。

（Ⅴ）フォロースルー期時点の非投球腕の腕の振りが身体の近い部分を通過するようになり、より縦に腕が振られるようになった。

運動・スポーツ指導現場における暴力行為（体罰）に関する一考察

～大学生と高校生に対するアンケート調査をもとに～

スポーツ科学コース 辻田研究室 指導教員 辻田宏先生 B102H209M 島谷直希

1. はじめに

2012年12月23日に大阪市立桜宮高等学校のバスケット部主将が体罰を受けた末、自殺をした事件を例として、運動・スポーツ指導現場における体罰という名の暴力行為は、中学校及び高等学校の部活動に占める体罰の割合が非常に高くなっている。しかし、日本では、第2次世界大戦前に制定された教育令（明治13年12月28日布告）から始まり、小学校令（明治23年10月7日布告）、学校教育法11条（昭和22年3月29日布告）に至るまで、体罰禁止規定が存在し続けてきた。しかしながら、日本の運動・スポーツ指導現場から体罰が無くならない。

体罰に関する研究のほとんどが、高校生のみあるいは、大学生のみを対象とした研究が多く、高校生及び大学生を対象とした研究はほとんど無い。そこで本研究は、体罰という名の暴力行為は違法であるという認識の上で、本学学生と高知市内の高校生を対象としたアンケート調査を行い、教員・指導者の暴力行為（体罰）の実態を明らかにし、体罰を行った教員・指導者の共通点、さらには体罰が世代を超えて繰り返される原因などを明らかにすることを目的とした。

2. アンケート

(1) アンケート内容

質問項目は大きく分けて体罰の概要と被アンケート記入者の体罰に対する考えの2つである。

(2) アンケート対象者

高校生対象アンケートは、帯屋町及び本学学内などに入校している高校生に対し、大学生対象のアンケートは、本学学内の授業及び学内で無作為かつ無記名で本学学生にアンケートの記入を募り行った。

(3) 分析方法

データ分析は、まず単純集計及びクロス集計を行い、統計処理にはSPSSを使用した。

3. 結果

アンケート調査に基づき、各調査項目においてSPSSを用いて、表を作成した。

4. 考察

アンケート調査の結果を基に、SPSSを用いてクロス集計を行った。体罰の種類によって、受けた体罰に対する意識の差が明らかになったが、体罰を行う教員・指導者の共通点は明確に確認することはできなかった。

5. 結語

高知市内の高校生及び本学学生のアンケート調査から、精神的な暴力が受けた体罰に対する意識で許されない体罰に最も該当すること、子どもに対する人権の意識の希薄性も明らかとなったが、教員・指導者の共通点を明確にするまでの十分なデータを揃えることができなかった。比較対象を取れる質問項目を用意し、さらに多くのサンプルを収集すると明らかにすることができるともかもしれない。

短距離走における体幹筋トレーニングの効果についての一考察

スポーツ科学コース 駒井研究室 指導教員：駒井説夫 B102H210R 諏訪裕祐

陸上競技の短距離走は、ある一定の距離を爆発的かつ瞬発的なパワーを発揮するスポーツである。短距離走に対する指導・練習ではトレーニングに様々な工夫が導入され、記録の短縮を目指している。その短距離走の記録の短縮要因とは、ピッチ×ストライドで規定され、両者もしくはどちらかを増加させるためトレーニングを行う。本研究では、動的な体幹筋トレーニングを実施することにより、短距離疾走のピッチを中心とした諸要因に及ぼす影響について明らかにすることで今後の短距離走のトレーニング方法を計画するための一資料とすることを目的とした。

被験者は本学陸上競技部に所属する健康な男子短距離選手 9 名(19 歳～22 歳)を用いた。競技力は、全国大会出場者から地方大会出場レベルの範囲であった。なお測定項目は、腿上げでは腿上げの時間、接地時間及び滞空時間、最大自転車運動時では回転数、最大無酸素パワー及び体重あたりの最大無酸素パワー、加速走では一定区間のタイム、ピッチ数及び身長ストライド比の 3 種目 9 項目について測定した。

各測定項目における実験内容で動的体幹筋トレーニング前後に有意な差が認められたのは腿上げにおける時間及び接地時間、最大自転車運動時の回転数、最大無酸素パワー及び体重当たりの無酸素パワー、加速走におけるタイム及びピッチ数が認められた。各測定それぞれ運動様式が異なり、動員される筋群も異なるが身体を中心部分である体幹筋群は短距離パフォーマンスに多いに影響することになると推測される。また、今回はウォーミングアップ時の一過性の効果について検討したが、今後は定期的実施することによって継続的な最大パワーを発揮能力が高めることが期待できるだろう。今回の測定された 3 項目において動的体幹筋トレーニングの効果を得ることができたので、動的体幹筋トレーニングが短距離走におけるピッチの増加に貢献していることが推察され、今後の短距離走トレーニングの計画を検討するためには動的体幹筋トレーニングが有効な手段であることが示唆される。しかし、被験者別の効果の差がどのようなことに影響されるかということを充分解析することができなかったため、今後は被験者の身体的特徴を十分に把握し、更に検討する必要があるだろう。

バレーボール選手の心理的競技能力に関する一考察

スポーツ科学コース スポーツ心理学研究室 指導教員 矢野宏光 B102H211P 氏名 瀬川元稀

I 研究目的

スポーツ競技者が満足のいく試合結果を残すには、技術面の強化のみならず、緊張・不安に打ち勝つための心理面の強さが必要である。身体面の強化に比して、心理面の強化に対する注目は未だ十分とは言えず、専門種目ごとの心理的競技能力に関する論文は少なく、不明な点が多く存在している。そこで本研究ではバレーボール選手の心理的競技能力を測定し、対象者を性別・属性・競技年数・競技実績・ポジションなどのカテゴリーに分類し、分析を行い、心理的競技能力の差異を明確にすることで、今後のトレーニングや指導に役立てていくことを目的とした。

II 研究方法

1. 調査対象者 155名

高知県内のバレーボール部に所属している中学生(男子25名、女子44名)・高校生(男子18名、女子25名)、四国バレーボール連盟に所属する大学生(男子38名、女子25名)の計175名に対して調査を行い、信頼性が低いと判断された回答(Lie Scale)と記入漏れがあった回答の計20名(男子11名、女子9名)を分析から除外した。

2. 調査内容

1)フェイスシート

対象者の性別・属性・競技年数・競技実績・ポジションなどのカテゴリーを回答するシートを作成した。

2)心理的競技能力診断検査(DIPCA.2)

徳永ら(1995)によって開発された5因子12尺度からなる質問紙であり、スポーツ競技者の心理的競技能力を測定することができる。

3. 分析方法

フェイスシートにより分類されたカテゴリー別のDIPCA.2の点数に対してt検定または1要因の分散分析及び多重比較を用いた分析を実施した。

III 研究結果及び考察

1. 性別

対象者のDIPCA.2の得点について性別によるt検定を行った。

自信、作戦能力の因子において男性が女性よりも有意に高いことが明らかになった。さらに自信因子下にある決断力の尺度においても男性が女性より有意に高いことが判明した。また作戦能力因子下にある判断力の尺度でも男性が女性より有意に高いことが明らかになった。これは男性が女性よりも一瞬の判断や決断が得意であると言えよう。それに対し、女性は協調性の尺度において男性よりも有意に高い結果となった。女性は男性よりもチームの雰囲気や尊重するという傾向が強いことが分かる。

2. 属性

対象者のDIPCA.2の得点について、属性(中学生・高校生・大学生)を要因とした1要因分散分析を行った。

勝利意欲の尺度において、中学生・高校生が大学生よりも有意に高い結果を示した。大学生は中高生より生活に自由度が高いことや、これまでの競技継続を通して、勝負以外の部分にもスポーツの価値を見出すことで、他の属性よりも勝利志向が低くなっていると推察される。一方で、高校生は競技と向き合う時間が最も長く、勝利へのこだわりが一番強いと考えられる。

3. 競技年数

対象者のDIPCA.2の得点について、競技年数(4年以下・5～9年・10年以上)を要因とした1要因分散分析を行った。

自信を構成する尺度(自信・決断力)において、競技年数に比例して点数が高くなり、10年以上競技を続けている選手が4年以下の選手と比べ、有意に高いことが示された。総合点(DIPCA.2全尺度の合計点)でも競技を10年以上続けている選手が競技年数4年以下の選手より有意に高いという結果が得られた。しかし勝利意欲の尺度でのみ、競技を5年～9年続けている選手の方が競技年数10年以上の選手より有意に高いことが分かった。

4. 競技実績

対象者のDIPCA.2の得点について、競技実績(県大会出場・ブロック大会出場・全国大会出場)を要因とした1要因分散分析を行った。

ブロック大会・全国大会出場選手は闘争心の尺度で、県大会出場選手より有意に高いことが判明した。全国大会出場選手は総合点でも県大会出場選手より有意に高いことが明らかになり、全国大会に出場する選手は心理的競技能力が高いと言える。

IV 結論

本研究から以下の点が明らかになった。

1. 女性は男性より協調性が高く、チームの雰囲気を守る意識を持つ。
2. 中学生や大学生に比べ、高校生が最も勝利志向が強い。
3. 競技を続けている年数に比例して選手の自信が強くなり、10年以上続けた選手は心理的競技能力が高いと言える。
4. ブロック大会・全国大会に進出している選手は県大会出場程度の選手より闘争心が高く、全国大会に出場している選手は心理的競技能力が高い。
5. ポジションによって心理的競技能力に差は認められない。

スポーツ指導での体罰についての一考察

教育学部 生涯教育課程 スポーツ科学コース

スポーツ指導学研究室 指導教員 野地照樹

B102H212N 田川 義豊

1. 研究目的

これまで、体罰について様々な研究が行われ、体罰を根絶するための運動も行われてきた。しかし、体罰は根強くはびこり、なくならないのが現状である。また、文部科学省の調査では、運動部活動での体罰が最も多いと報告されている。

そこで本研究では、スポーツ指導の場面での体罰に焦点を絞り、なぜ体罰が行われるのかを考察するとともに、体罰を分類し、体罰を根絶するための方法を追求することを目的とした。

2. 研究方法

まず、体罰に関する文献及び先行研究の検討を行い、体罰の定義、種類、原因について見識を深めた。

次に、アンケート調査において、現高知大学体育会サッカー部の選手を対象に、小中高年代での、スポーツ（サッカー）活動において、体罰の経験の有無、体罰の実態について調査を行った。また、野地・吉田の先行研究で得られた、16年前の体罰の実態と、現在の体罰の実態を比較し、考察を行った。

3. 体罰の事例の検討

今までの体罰事件での、判決や教育委員会の対応を見てみると、裁判所や教育委員会が、体罰の危険性に気付き、体罰と傷害、体罰と自殺などの関連性を認め始めたのは、本当に最近のことであるとわかる。つまり、つい最近まで、いかに学校教育やスポーツ指導の場面で、体罰が普及していて、いつ生徒や選手が、事件にまきこまれてもおかしくない状況にあったかということである。

4. 文献及び先行研究の検討

体罰の起こる原因で、キーワードになるのは、「勝利至上主義」である。阿江は、「勝つための技術の習得への指導効果を焦るあまり、体罰を行う」とし、梅津は、「スポーツにおける勝利に対して『スポーツ以上の価値』が付与されるようになったこと」が、理由としている。

また、体罰経験者が、体罰を容認する傾向にあることについても触れている。梅津は、「成育環境の中で暴力を受けると、その経験は次世代に再生産される」と述べ、富江は、「体罰をなくすためには、指導者自身が自らの経験を相対化し、改善すべき」としている。

さらに野地は、教育現場での体罰について、「部活動が課程外に位置づけられて、『聖域化』・『密室化』していることも原因である。」としている。

5. アンケート調査

調査の結果、16年前に比べて、「練習中」・「練習後」・「ハーフタイム中」・「試合後」の各場面において、約6割に減少していた。また、体罰の頻度も日常的な体罰から、突発的な体罰へと変わっている。このことから、体罰の種類が、トレーニングの一環として行われていたものから、指導者が感情的になった際に行われる体罰へと変わってきていると考えられる。つまり、「過度な走りこみ」・「根拠のないしごき」が減少し、「選手に対する檄」としての、体罰が増えていると考えられる。選手の指導者に対する信頼度である、指導のうまさ・好感度が、16年前に比べ飛躍的に高くなっていることは、このことへの十分な根拠になると考えられる。

6. 結論

文献研究・アンケート調査で得られたように、体罰の原因はさまざまあり、様態もさまざまである。また、件数は減少したといっても、体罰が根絶されていないのは許されることではない。

では、体罰を根絶するためにはどうすればよいのか。それは指導者が、「指導の目的・方向性」を常に自問自答し、指導の質の向上を図り続けることである。また、指導者自身が、体罰によって選手にどのような影響を与えるのか、体罰にはどのような危険性があるのかを理解したうえで、指導方法を見直し、体罰を行わずに行える指導方法を確立できるようにするべきである。

競泳選手の専門距離別心理特性と心理的競技能力

スポーツ科学コース 指導教員 矢野宏光 学籍番号 B102H213 氏名 寺西亜里彩

I. 研究目的

競泳選手には、専門とする種目のほかに、専門とする距離が存在する。選手は幼い頃から専門とする種目と距離を見極め、それぞれに合わせた練習に取り組んできた。この長年の習慣がパーソナリティや心理的競技能力に影響を与える可能性は大きいと考える。そこで本研究では、高校生の競泳選手の心理特性と心理的競技能力を明らかにし、さらに専門距離との関連性を調査することを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究対象者

第 64 回四国高等学校選手権水泳競技大会に出場した選手から質問紙を回収し、有効回答の 236 名(男子 124 名、女子 109 名、無回答 3 名)を研究対象とした。平均年齢は 16 ± 1.77 であった。

2. 調査期間

平成 25 年 7 月～8 月 31 日

3. 調査内容

1) フェイスシート

専門種目や距離について回答を求めた(表 1)。

2) ストレス対処法質問紙

渡辺(1986)によって開発された職務上のストレスにどう対応しているかを測定する。

3) 心理的競技能力診断検査(DIPCA.2)

徳永ら(1995)によって開発された。スポーツ選手としての心理面の長所・短所を診断する。

4. 分析方法

ストレス対処法質問紙を得点化し、3 つの心理特性に分類した(表 2)。また、DIPCA.2 から得られた各尺度と因子を得点化し、統計解析ソフト R を用いて分析した。分析は、専門距離と心理特性を要因とする 2 要因の分散分析及び多重比較を用いた。

III. 研究結果

本研究の結果から以下の点が明らかになった。

1. 心理特性 F 群(以下 F)の中には、短距離群しか含まれておらず、一方、心理特性 P 群(以下 P)と心理特性 E 群(以下 E)には、中・長距離群が含まれている。F の心理的競技能力は P・E に比べて有意に低かった。

2. P の短距離群は、P の長距離群よりも自己コントロール能力が有意に高く、精神の安定・集中が有意に高いという傾向が認められた。また、P の中距離群は、E の中距離群よりも忍耐力と決断力が有意に高かった。

3. E の長距離群は、P の長距離群よりも自己コントロール能力が高く、精神の安定・集中が高いという傾向が認められた。また、E の長距離群は、E の中距離群よりも忍耐力が有意に高かった。

本研究の結果をふまえ、競泳選手の専門距離や心理特性に合った練習方法や指導方法を組み立て、選手の育成に活かすことが今後の課題である。

表 1 専門距離分類表

専門距離	1:短距離(50m,100m)
	2:中距離(200m,400m)
	3:長距離(800m,1500m)

表 2 ストレス対処法質問紙下位尺度(渡辺,1986)

P(問題焦点型)	積極的な問題解決の努力や他の人の援助を求める
E(情緒焦点型)	情緒的な苦悩を低減したり、コントロールしたりする努力を行う
F(闘争/夢想型)	直接的な闘争行動や間接的な夢想の世界で闘争する

参考文献

1. 堀洋道,山本真理子,松井豊編集(1994)人間の社会を測る.心理尺度ファイル,p545-550
2. 徳永(1995),心理的競技能力診断検査(DIPCA.2)-引き.トーヨーフィジカル株式会社

サッカーのゴールキーパーのセービングに関する運動学的一考察

教育学部 生涯教育課程 スポーツ科学コース
スポーツ運動学研究室 指導教員 神家一成
B102H214T 那谷侑平

1. 研究目的

本研究では、サッカーのゴールキーパーのセービングにおいて、より安定したボール処理を可能にするためには、十分にボールに接近し、ボールに対応する腕や姿勢に余裕をもたせる必要があると考え、ボールにアプローチするためのジャンプ動作の中でも「踏み切り脚とは逆側の脚の引き上げ」に着目し、その後のボール処理動作にどのような影響を与えるのかを、被検者の運動内観とともに明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

高知大学体育会サッカー部に所属するゴールキーパー4名を対象とし、被験者から見てゴール右側の遠距離一中高度、遠距離一高高度にそれぞれ2回ずつ投げられたボールへのセービングを行わせた。一次実験では、踏切からボール処理まで一直線を意識させ、二次実験では、ジャンプ動作時に踏み切り脚とは逆側の脚を引き上げるように意識させた。さらに、一次実験と二次実験をビデオカメラで撮影し、三次元解析ソフト「Frame-DIAS IV」によって資料化、被験者ごとに自己観察記録と比較しながら動作の変化及び運動内観の変化を考察した。

3. 結果と考察

映像分析と自己観察記録より、踏み切り脚とは逆側の脚の引き上げ動作が、ボール

処理と運動内観にどのような影響を与えるのか考察した結果、以下のことが明らかとなった。

- 1) 踏み切り脚とは逆側の脚の引き上げ動作によって、ジャンプに勢いが増した。また引き上げの力をボール方向へ向けるには、身体の軸を保つ必要がある。
- 2) ジャンプに勢いが増すことで、身体全体が地面から上がり、よりボールに近づくことができた。
- 3) 身体がボールに近づくことで、腕は肘を曲げ構えた状態を維持することができ、腕に余分な力が入らず、余裕をもってボールを処理することができた。
- 4) 身体全体が地面から上がった状態でボール処理を行うことで、その後の着地までに時間が生まれ、着地の準備動作を行う余裕ができた。
- 5) 遠くに跳ぶ感覚や、キャッチングに余裕を感じるなど、ジャンプ動作及びボール処理の段階に運動内観の変化が見られた。

以上のことから、ゴールキーパーのセービングにおいて、踏み切り脚とは逆側の脚の引き上げ動作は、ボール処理を安定して行うことに、効果的な影響を与えることが明らかとなった。

高知県と静岡県のサッカー文化の比較

－第4種を中心に－

スポーツ科学コース 野地研究室 指導教員：野地照樹

学籍番号 B102H216K 氏名：宮川晃至

I. 研究目的

1993年にJリーグがスタートしたときに、Jリーグは「Jリーグ百年構想 ～スポーツで、もっと、幸せな国へ。～」というスローガンを掲げ、「地域に根差したスポーツクラブ」を核としたスポーツ文化の振興活動に取り組んできた。今では、Jクラブの存在が地域にもたらす効果は計り知れないものとなりつつあるとともに、地域にとってJクラブは、必要不可欠な存在にさえなっている。このように、JリーグやJクラブが、地域と一体となってスポーツ振興を行うことは、今や当たり前のこととなりつつある。このような中で、高知県にはJクラブが未だに1クラブもないというのが現状だ。四国県内に限ってみても、JクラブまたはJFLチームがないのは高知県だけである。

そこで、本研究では、高知県サッカーの現状を調査し、サッカー王国といわれ、サッカー文化が根付いているといえる静岡県の現状と比較・考察し、高知県のサッカーが、静岡県のサッカーから学ぶべきものは何か、考えていきたい。特にサッカー文化の中でも、サッカー人口の相違や環境面、選手・指導者の育成システムなどに注目して問題点や課題を明らかにし、高知県サッカーの発展のための基礎的資料にすることを目的とする。

II. 研究方法

1) 資料・文献研究

・先行研究で明らかになった高知県の現状の問題点や課題について考察し、静岡県の現状と比較する。

・静岡県サッカー協会と高知県サッカー協会から提出されたデータをもとに登録数の比較・考察をする。

2) 静岡県・高知県サッカー協会への聞き取り調査

・先行研究や資料から仮説を立て、調査結果から現在の高知県サッカーの現状を把握し、先行研究と比較することで、問題や課題は改善されたのか、新たな問題は何かを確認する。また、高知県と静岡県を比較し考察することで、高知県サッカーが発展するためには何が必要なのかを考える。

■対象

- ・一般財団法人静岡県サッカー協会
- ・一般社団法人高知県サッカー協会

III. 結果及び考察

高知県第4種の選手登録数とチーム登録数は、静岡県に比べ大きな差があるとともに、全国でも最下位である。また、静岡県に比べ、指導者数についても大きな差があり、静岡県には、高知県の約11倍の指導者が存在している。まず、高知県サッカーのレベルアップのためには、第4種の選手登録数や指導者数を増やしていく必要がある。さらに、静岡県と高知県のサッカーにおける大きな違いは、Jリーグチームの存在である。Jリーグチームが子どもたちにもたらす影響はとて大きく、静岡県では現在3チームJクラブが存在しており、子どもたちはプロサッカー選手に憧れ、多くの子どもがサッカーに熱中している。反対に、高知県には未だにJリーグチームがなく、高知県と静岡県の子どもたちを比べると、サッカーに対する関心度には大きな差が生まれる。この差をどのように埋めるかが、今後の高知県サッカーの課題になると思われる。高知県と静岡県のサッカーを比較研究した際、様々な面で高知県は静岡県に劣っていることがわかる。今後、静岡県サッカーをお手本にしつつ、発展していく必要がある。

IV. 結論

高知県第4種の選手登録数はまだまだ少なく、登録数を増やしていく必要があるが、「キッズプログラム巡回指導」の成果により、ここ最近徐々にではあるが増加している。今後も、選手登録数を増やす活動を積極的に行っていくべきである。また、現在高知県のJリーグチームは存在していないが、高知大学サッカー部が、その代わりとなっていくことができると考える。高知大学サッカー部が、子どもたちの憧れとなる存在になり、高知県サッカーを牽引していけば、高知県サッカーはもっと発展していくのではないかと考える。そのためには、高知大学サッカー部下部組織を作ったり、サッカーフェスティバルを積極的に開催したりと、高知県サッカーの先頭に立ち、活動していくべきだ。

チームの強さは何でつくりあげられるのか？ ～集団規範・凝集性と自律性との関連性から～

スポーツ科学コース スポーツ心理学研究室 指導教員 矢野宏光 B102H217M 氏名 宮地夏帆

I. はじめに

遠藤ら（2009）は、「集団スポーツでは、従来から集団としてのパフォーマンスの向上に様々なアプローチを試みている。連係プレーなどの技術的側面の他に、集団としてのまとまり、チームワークという精神的側面にもかなり強調点を置いている。体力や技術にすぐれていても、チーム内の選手間にまとまりがないと、試合に負けてしまうケースはよく見られる。チームが集団として機能するために最も良い状態にあることが、最も良いパフォーマンスを生み出すと考えられる」と述べている。先行研究においても、大学男子バレーボール選手を対象とした調査の結果、競技水準が高い方が集団凝集性は高く、集団規範も厳しいということが示唆されている（遠藤ら，2009）。しかし、著者は、個々が自律していれば、集団規範や集団凝集性がさほど高くなくとも、優れた競技成績に結び付くのではないかと考えた。

II. 研究目的

本研究では、集団規範と集団凝集性の関係を明らかにし、また競技水準という変数を増やし、集団規範及び集団凝集性との関連性をより明確に分析する。さらに、女子バレーボール選手の特性と各年代による集団規範に対する意識の変化を自律という観点から分析し、今後の指導場面におけるチームづくりに役立てる一資料とすることを目的としている。

III. 研究方法

1. 調査対象者及び調査方法

女子社会人：3名一面接調査

（平均年齢 30±11.67 歳）

女子大学生：1)高水準 2)標準 計 91 名一質問紙調査

（平均年齢 20±2.63 歳）

女子高校生：1)高水準 2)標準 計 65 名一質問紙調査

（平均年齢 16±1.16 歳）

2. 調査期間：平成 25 年 8～12 月

3. 調査内容：1) フェイスシート 2) 質問紙 (①運動部の集団規範尺度②集団凝集性尺度)

4. 分析方法：統計解析ソフト R を用いて統計処理と

分析を実施した。フェイスシートから得られた各選手のデータを「種別」「競技水準」のカテゴリー別に分類し、はじめに、集団規範と集団凝集性の関係を相関分析にかけ、その後、分類した変数を 2 要因とする分散分析を実施し、交互作用が認められたものについては単純主効果の検定を行った。さらに集団規範を構成する 5 因子について、種別と競技水準を要因とした 2 要因分散分析を行い、因子ごとに検討を行った。

IV. 研究結果及び考察

集団規範と集団凝集性を要因とした相関分析において、有意な相関がみられた。集団規範においては、種別で比較した場合、高校生の方が大学生よりも有意に規範が厳しく、競技水準でみると高水準が標準よりも有意に規範が厳しいことが明らかとなった。また、集団凝集性においては、種別で比較した場合、高校生が大学生よりも有意に高く、競技水準でみると高水準が標準よりも有意に高いことが明らかとなった。さらに、集団規範尺度を構成する 5 因子について分析を行った結果、種別でみると、態度規範と上下序列規範以外の 3 因子において、大学生よりも高校生が有意に高い値を示し、競技水準でみると、5 因子全てにおいて、標準より高水準が有意に高い値を示した。

V. まとめ

- 1) 集団規範が厳しいと集団凝集性は高くなることが判明した。
- 2) 集団規範は、大学生よりも高校生が厳しく、標準よりも高水準が厳しいことが判明した。しかし、大学生の高水準においては、規範に対して厳しいと感じているものとそうでないものの両者が混在しており、必ずしもチーム内の全成員が、規範に対して同じ感覚や意識を持っているわけではないということが考えられる。
- 3) 集団凝集性においても、大学生より高校生が高く、標準より高水準が高いことが判明した。
- 4) 自律した成員で構成された集団であれば、厳しい規範を設けなくとも、年代に関係なく強いチームになれる可能性も示唆された。

サッカーゲーム中における審判員及びボールの移動距離に関する一考察

スポーツ科学コース 駒井研究室 駒井説夫 B102H218U 森永教稔

【研究目的】

現代のサッカーでは、スペインのようなボールと人が良く動くパスサッカーが主流となっており、審判員も適切な判定をするために、同様の運動量が必要である。そこで体力的資質を評価する移動距離を測定し、ボールの移動距離との関連を調べることによって、今後の高知県サッカーの審判員のレベルアップのための生理学的知見から見た一つの指標となることを目的とする。

【研究方法】

1) 被験者；本学体育会サッカー部に在籍している審判員4名（2級及び3級審判員）高知県在住の2級審判員1名であり、審判員A～Eとする。2級審判員は審判員BとEであり、それ以外は3級審判員である。2) 対象；本学体育会サッカー部で開催されるIリーグ4試合（試合形式は40分ハーフ）と県内で実施された高知県県リーグ1部の順位決定戦（試合形式は40分ハーフ）である。3) 主審の移動距離の記録；GPSを使用し審判の移動距離・移動の軌跡・移動速度を測定。4) ボールの移動距離の記録；距離の算出はキルビメーターを用い、空中のボールは平面として記録した。5) 試合別に主審・R及びボールBの5分毎の平均値によるR/Bの比率。

【結果】

①審判員の5分毎の移動距離；2級審判員の移動距離は480～550m、3級審判員では410～510mであった。前半・後半の移動

距離を比較すると大きな差異は見られなかった。②ボールの移動距離；2級審判員の担当した試合では、1270～1370mであり、一方3級審判員の担当した試合では1150～1330mであった。③ボールと審判員の移動距離の比率；2級審判員では39～44%であり、3級審判員では31～43%であった。また、前半・後半を比較してみると2級審判員では、ほぼ変わらず安定した移動距離を保ったが、3級審判員では後半に大きな低下や上昇の傾向が見られ、必ずしも安定した移動が認められなかった。

表1 ボールの移動距離とR/B比

	ボールの5分間の平均移動距離 (m)			R/B 比		
	前半	後半	1試合	前半	後半	1試合
A	1131	1186	1158	44	41	42.7
B	1260	1289	1274	43	44	43.8
C	1281	1382	1332	30	33	31.3
D	1388	1260	1374	45	32	37.2
E	1216	1151	1184	39	38	39
平均	1255.2	1253.6	1264.4	40.2	37.6	38.8

【まとめ】

移動距離では2級・3級審判員の間に明確な差異が認められなかったが、ボールと審判員の移動距離の比率をみると、2級審判員のほうが高い値をしめし、さらに前半と後半の比較を行うと、安定して試合の中で走ることが出来ていると示された。このことから、2級審判員がサッカーの試合の中で適切な判断を下すために試合の状況を読んで適切な距離をはしり、適切なポジショニング取りを行っていることが考えられた。この点については、3級審判員と2級審判員の間に明確な差が認められた。

サッカー選手のポジションと性格に関する一考察 ～高知大学体育会系サッカー部を対象として～

スポーツ科学コース スポーツ指導学研究室 指導教員 野地輝樹 B102H219Y 山崎晋哉

1. はじめに

サッカーにおいても、攻撃の選手は点を取るために相手ゴールに前向きで積極的に攻撃を仕掛ける一方で、守備の選手は、常に安定した確実性のあるプレーが求められるなど、11人の選手が各ポジション(GK, DF, MF, FW)でそれぞれの役割を持っている。また、サッカー選手の中には、冷静沈着に状況に応じてプレーする選手や少し気性の荒い選手など様々なタイプがいる。そこで本研究にあたって、サッカー選手の性格の違いに目を付けた。

今まで私自身もそうであったが、自分の性格を吟味した上でポジションを決定したことはない。それ故に、個々の性格が今まで以上に顕著に割り出すことができると、その選手に適したポジションを見出すことができるかもしれない。そして、適したポジションでプレーすることによりその選手の能力を十分に発揮できるのではないかと考えた。

2. 研究目的

本研究は、現在サッカーを行っている選手個人の性格を調査し、各ポジションにおいて実際にどのような性格の違いがあるのか比較・分析し、今後の指導場面やサッカー選手のパフォーマンスの向上に役立てることを目的とする。また、高知大学サッカー部のチーム別(Aチーム、Bチーム、Cチーム)の比較や学年別で比較することによって、高知大学体育サッカー部の今後の活動に役立てることとする。

3. 研究方法

(1) 文献・資料研究

(2) 質問紙調査

1) 調査対象者：高知大学体育会系サッカー部員

105名

2) 調査期間：平成25年11月

3) 調査方法：調査は、研究対象者に「フェイスシート」と「自己認知の諸側面測定尺度」を配布し、検査を実施し、回収を行なった。

4) 調査内容

①フェイスシート

②自己認知の諸側面測定尺度(1982, 山本ら)

4. 結果及び考察

チーム別で比較した結果、Aチームの選手は、他のチームより自分の運動能力に自信を持っていることが明らかになった。また、Cチームは、他のチームより、自分の容貌に自信があり、個性的な生き方をしていると認知していることが明らかになった。学年別で比較した結果、3回生が高知大学に在籍していることに自信を持っていることが明らかになった。ポジション別で比較した結果、現在のポジションで比較した結果、すべての尺度で有意な差は、認められなかった。そこで、現在のポジションを6年以上競技している選手をポジション別で比較した結果、FWが、自分の運動能力に自信を持ち、頭の回転が早く、自分の外見に自信があつて、個性的な生き方をしている傾向があることが明らかになった。

5. 結論

- (1) Aチームの選手は、自分のことをスポーツマンタイプだと認知していること。
- (2) Cチームの選手は、自分の顔に気に入っていることがあり、個性的な生き方をしていると認知していること。
- (3) 3,4回生は1回生よりも頭の回転が早いと認知していること。
- (4) 現在のポジションを6年以上競技している選手をポジション別で比較した結果、FWは自分のことを運動能力が高く、頭の回転が早い上に知性があると思い、また、自分の外見に自信を持ち、個性的な生き方をしていると認知している傾向があること。

しかし、ポジション別の比較では、調査人数が少ないことやポジション別に人数の偏りがあつたので、明確な結果ではなく、あくまで参考程度の結果となった。

車椅子バスケットボール競技者の困難克服と生活観に関する研究

～先行要因・心理的要因・外的要因に着目して～

スポーツ科学コース スポーツ社会学研究室 常行泰子

B102H220N 山本有茄

1. はじめに

スポーツは今日、ますます高度化、専門化の一途をたどっている。障害者スポーツとは身体障害や知的障害などの障害がある人が行うスポーツのことである（吉田, 2012）。既存のスポーツを障害者の要求に応じて修正したものが多い。「（障害者に）合わせたスポーツ」の意味でアダプテッド・スポーツともいう。しかしながら、全部が健常者のスポーツの修正版ではなく、障害者のために考案された独自のスポーツもいくつか存在する。障害者選手のためのスポーツは、障害の種類によって、聾者・身体障害者・知的障害者・精神障害者の4グループに分けられる。それぞれに個別の歴史があり、組織・競技大会・取り組み方もまた異なる。よって、本研究では高知県の車椅子バスケットボール競技者における困難克服と生活観に関する要因を先行要因・心理的要因・外的要因からを明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

対象者は高知県の車椅子バスケットボールクラブに所属する男性10名、女性1名であった。個人面接法による半構造化インタビューを行った。インタビューのガイドラインを作成し、男性4名、女性4名を対象に予備調査を実施した。調査項目や内容及び方法等に問題がないことを確認した後、大学のグループ演習室や情報提供者の職場を利用し本調査を進めた。

3. 結果及び考察

本研究の結果から、車椅子バスケットボール競技者の困難克服については、先行要因と心理的要因、外的要因も複合的に影響力を持つことが示唆された。樋上ら（1996）は中・高齢者の運動実施を規定する

要因として「心理的要因」と「外的要因」を挙げているというように、本研究でも同様にことが言える。

「もしも、車椅子バスケットボールをしていなかったら今何をしてるんやろ車椅子バスケットボールのおかげで結婚もできたしね。いろんな出会いがあるよ。世界が広がるね。人間関係が広がるね。」という男性（事例 B）の叙述は、家族による支援の重要性を表しており、運動に取り組みやすい生活や家庭環境が運動行動の鍵となっているという。「いい汗をかくて練習後に帰宅して、お風呂に入ってすっきりする。（事例 A）」や「体のため（事例 C）」、「ストレス解消（事例 I）」などの心身の両側面から運動はすべきだと考えている事例が多く、現在の健康状態観としても「今は結構いいね（事例 B）」のように良好であると受け止めている事例が多い。運動行動をしている現在の状態で、良好な健康状態を保てているということも、運動行動を継続する要因になっていると考えられる。運動実施は、疾病、疾患などの生理学的な健康づくりを目的とするだけでは十分とは言えず、心身の健やかさや美しさを維持、向上し得る運動効果が期待されるといえよう。「職場の人の応援（事例 G）」などの促進要因となる側面を持ち合わせていることから、職場を含めた運動支援の有効性が示唆される。障害のきっかけとなった出来事として、「工作中的の事故（事例 A）」や「バイクでの事故（事例 C）」、「生まれつき（事例 E）」などと様々であった。その時の心境として、「ショックはショックやったけど、まあ、今となったらこれで生きていくしかないから（事例 C）」や「別に障害を持ったことには違和感はなかった（事例 D）」など、様々である。

小学生年代における 8 人制サッカーに関する一考察

スポーツ科学コース 野地研究室 指導教員：野地照樹

学籍番号：B102H221S 氏名：渡部亮武

1. 研究目的

日本サッカー協会が掲げている三位一体+普及という 4 本の柱の強化があげられる。代表強化・指導者育成・ユース育成、そして日本全体でのサッカーの普及、この四つの強化を図ることで世界と戦おうとしている。ユース育成のテーマとして、ゴールデンエイジ(9~12 歳)と呼ばれる、最も技術スキルが習得される小学生年代に、いかにして技術をつけさせるかが大きなポイントである。この小学生年代を対象に行われる、全日本少年サッカー大会で新たな取り組みとして、2011 年から 8 人制サッカーが導入された。本研究では、2011 年度全日本少年サッカー大会から導入された 8 人制サッカーの有効性を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

先行研究、様々な文献による調査。

そして高知県の小学生チームの指導者に 8 人制サッカーに関するアンケートを行い、意見を求めた。さらに、過去 5 大会分の全日本少年サッカー高知県大会の決勝の映像から 11 人制サッカーと 8 人制サッカーの比較研究を行った。

3. 結果と考察

文献研究、アンケート調査、映像分析で様々なことがわかってきた。

1) 小学生年代は一生に一度だけ訪れる「即座の習得」を備えた時期で、この年代の子どもたちの練習において必要なのは、走ることや戦術的なことではなくサッカーに必要な技術をつけさせることである。そして技術向上のため、たくさんボールに触れる機会が増える 8 人制サッカーがこの年代に適しているといえる。

2) 調査の結果、9 割の指導者が 8 人制サッカーの目的、ねらいに関して理解していることが示された。さらにボールタッチが増える、ゴール前の局面が増えるといったより具体的な回答も得られた。

3) 調査の結果ほとんどの項目で予想通りの結果が得られたが、パスの本数に関しては予想とは異なりあまり変化はみられなかった。8 人制にすることで観るものを減らし、広いスペースを与えたのにも関わらず、闇雲にロングボールをけるシーンが目についた。実際にゴールキーパーから誰にも触れずゴールキーパーまで行くシーンもあり、本当にこれで技術の向上が図れるのかとも感じた。目先の勝利のために本質である技術の向上という目的が薄れているように感じられた。

4) メリット、デメリットで様々な意見が得られた。選手数が少ないチームにとっては試合ができるが、反対に選手数が多ければ控えの選手が多くなる。チームによってはプラスにもマイナスにも働くこともある。しかし、失敗だという意見は 0 人であったように今回の取り組みが間違いだと考えている方はいなかった。また 3 年目で判断できない、今の選手が大人になって初めて評価できるという意見があったように現段階での評価は難しいのかもしれない。

以上のことから私が出した結論は、8 人制サッカーの導入は間違いではなく、今成功へと向かっている途中だと考えられる。まだ 3 年目で至らない点も多いが、これからも様々な観点を見直し、育成を大きな柱におくことで今回の取り組みは成功だといえる日がくるだろう。